

ビワ生育情報

千葉県
平成19年7月号

最近1年間の気象及びビワの生育状況

前年7月から本年6月までの月別気象は表1に示した。平均気温は平成18年10月～19年3月及び5月が平年を上回った。この1年間の平均気温は15.8 で平年より0.2 、前年より0.7 高かった。

本年産のビワの生育状況を振り返ると、平成18年の梅雨明けは7月30日で平年より10日遅く、夏の気温が平年より低いことから、花房の着生率は平年より低く、花房の出蕾も遅れた。関東に接近した台風は1個あったが、ビワ樹にはさしたる被害はなかった。冬の訪れは遅かったため、開花の進みは平年より1週間程度早かった。冬の天候は厳しい寒さもなく(-3 以下の日が一度もなかった)、寒害の被害はほとんどみられなかった。春先の天候は気温の低い日があったが、果実の肥大は平年より進んでいた。5、6月の天候は気温及び降水量は平年並みであったが、日照時間が平年より多く、果実の肥大は早く、収穫期も平年より早かった。

表1 平成18年7月～平成19年6月の気象 (暖地園芸研究所)

月	気 温()			降水量(mm)			日照時間(時間)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
7	23.6	24.4	23.9	236	181	180	93	175	120
8	25.4	25.8	25.8	294	162	189	198	220	184
9	22.5	23.0	23.2	195	249	131	139	146	179
10	18.4	17.9	18.4	204	251	148	156	137	114
11	13.7	13.3	12.2	200	156	109	146	144	165
12	8.9	8.6	6.1	291	73	13	123	166	193
1	6.8	6.1	4.6	96	98	159	113	169	133
2	8.3	6.3	6.9	75	95	184	171	151	114
3	10.1	9.1	9.3	97	189	124	184	154	154
4	12.8	13.9	12.8	129	172	153	162	166	156
5	18.1	17.8	17.5	183	174	174	213	186	137
6	21.0	20.9	20.8	105	238	178	210	135	106
平均/計	15.8	15.6	15.1	2105	2038	1742	1905	1949	1755

本年度産果実の特徴

1. 熟 期

収穫期は表2に示した。暖地園研の収穫始めは「楠」が5月24日、「大房」が5月29日、「田中」が6月8日で、いずれの品種も平年より4～6日早かった。収穫盛期は「楠」が5月27日、「大房」が6月2日、「田中」が6月12日で、いずれの品種も平年より5～8日早かった。収穫終期は「楠」が5月31日、「大房」が6月6日、「田中」が6月15日で、いずれの品種も平年より6～8日早かった。本年の収穫はいずれの品種も平年より早く始まり、早く終了した。

表2 収 穫 期 (暖地園芸研究所)

品 種	収穫始期(月・日)			収穫盛期			収穫終期		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	5.24	5.30	6.10	5.27	6.4	6.15	5.31	6.8	6.18
大 房	5.29	6.3	6.12	6.2	6.8	6.16	6.6	6.12	6.20
田 中	6.8	6.12	6.24	6.12	6.17	6.27	6.15	6.22	6.30

平年：最近24年間の平均

2. 果実の大きさ及び収穫量

収穫果実の大きさは表3に示した。果重は「楠」が54g、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ84g、79gであった。いずれの品種も平年より5%程度上回った。

横径は「楠」が4.6cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.4cm、5.1cmであった。いずれの品種も平年を上回った。縦径は「楠」が4.7cm、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ5.4cm、5.5cmであった。「楠」は平年を下回ったが、「大房」及び「田

中」は平年と同じであった。

果形指数は「楠」が0.96、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ1.00、0.94であった。いずれの品種も平年より高く、やや丸味を帯びた果形であった。

本年の着花房率は平年より少なかったが、寒害の被害はほとんどみられず、クワゴマダラヒトリの食害は平年並み、カメムシの吸汁害は少なく、暖地園研の収穫量は平年より10%程度多かった。

3. 糖度及び酸度

糖度及び酸度は表3に示した。糖度は「楠」が13.8%、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ11.2%、11.1%であった。いずれの品種も平年より高かった。

酸度は「楠」が0.15、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.16、0.31で、「楠」及び「大房」は平年より低かったが、「田中」は平年より高かった。

4. 食味

果実硬度及び糖酸比は表3に示した。果実硬度は「楠」が0.53、「大房」及び「田中」は3地区の平均でみるとそれぞれ0.58、0.60であった。「楠」及び「大房」は平年と同じであったが、「田中」は平年より高かった。

糖酸比は「楠」が平年より29ポイント、「大房」(3地区の平均)が13ポイント、「田中」(3地区の平均)が1ポイント高かった。

いずれの品種も平年以上の糖度を示し、多汁で、食味は良好であった。

5. 病害虫の発生

本年はカメムシの捕獲頭数が過去9年間の中で最も少なく、産地でのカメムシの発生量、吸汁被害は平年より少なかった。また、そばかす、紫斑、日焼け、たんそ病等の障害果の発生は平年並であった。

表3 果実の大きさ及び品質

品種	調査地	果重(g)		横径(cm)		縦径(cm)		果径指数		糖度(%)		酸度		硬度		糖酸比	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
楠	暖地園研	54	52	4.6	4.5	4.7	4.8	0.96	0.95	13.8	11.7	0.15	0.19	0.53	0.53	91	62
	青木	77	82	5.3	5.4	5.2	5.5	1.01	0.99	11.2	10.3	0.12	0.16	0.57	0.59	90	64
	大房	87	74	5.4	5.2	5.4	5.3	1.00	0.97	10.4	10.5	0.16	0.21	0.58	0.58	64	51
	暖地園研	89	78	5.4	5.3	5.5	5.4	0.99	0.97	12.0	11.1	0.19	0.20	0.58	0.59	63	55
	平均	84	78	5.4	5.3	5.4	5.4	1.00	0.98	11.2	10.6	0.16	0.19	0.58	0.58	70	57
田中	青木	79	74	5.2	5.0	5.4	5.4	0.96	0.93	11.1	11.2	0.33	0.26	0.61	0.56	34	42
	大房	78	71	5.1	5.0	5.6	5.5	0.92	0.90	10.3	10.2	0.27	0.31	0.59	0.58	38	33
	暖地園研	79	77	5.1	5.1	5.5	5.5	0.92	0.93	12.0	11.0	0.31	0.33	0.60	0.57	38	34
	平均	79	74	5.1	5.0	5.5	5.5	0.94	0.92	11.1	10.8	0.31	0.30	0.60	0.57	37	36

果径指数：横径/縦径 糖度：屈折糖度計の測定値 酸度：果汁100ml中の酸含量をリンゴ酸(g)に換算した値

硬度：果実硬度計による測定値 糖酸比：糖度/酸度

平均：3地区の平均、平年：最近24年間の平均(但し硬度は最近7年間の平均)

8月～10月の作業

8月下旬から9月一杯がせん定及び施肥の適期となる。9月中旬頃には花芽の確認ができるようになる。10月に入ると花芽の発育が進み、花房の形を表し、10月上中旬には摘房・摘らいの作業が始まる。

せん定

8月下旬から9月中旬に行う。徒長枝あるいは混みすぎた枝を間引いて日光を樹冠内部に入れる。また上方に徒長した枝は切りつめて樹高を下げ低樹高化に努める。

施肥

9月に基肥を施用して花房の伸長、充実をはかる。耕土の浅い園では10aあたり分量で窒素12kg、リン酸9kg、加里9kgを施し、耕土の深い園ではそれぞれ11kg、9kg、7kgとやや少なめにする。

摘房・摘らい

摘房は発育不良の花房や混み合った花房を間引き、1樹の全枝の半数に花房を残す。

摘らいは花房基部から3段目までの小花梗の中から充実した2段を残して他をかき取る。花房の長さが3～5cmの時に摘らいするのが開花期延長になり最も有効である。

【生育情報の問合せ先：千葉県農業総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>